

2011年度こひつじ診療所事業報告

小回りのきく精神科診療所として、地域に密着し特色のある福祉医療活動の実践に勤めた。

1. 児童精神科、発達障がい者にも対応できる精神科、心療内科として診療活動を続けた。

看護師、精神保健福祉士、臨床心理士、教師と共に、午前8時前より診察を開始し18時前後まで、40分ほどの昼休みを除いて、ほぼ絶えることなく診察に明け暮れた。水曜、金曜日には1日60～75名来院するが、初診診察には60分程度を確保している。発達障がいを含む3歳児前も含め、子どもの受診が多い（6歳未満22.2% 7～12歳19.7% 13～15歳15.2% 16～19歳7.9%：20歳未満計65.0%）。成人の受診も増加している。「まきばの家」「こどもの家」から以外でも、児童相談所、他の児童施設などの紹介も含めて、母親などから愛着を受けることが困難であったり、虐待を受けてきた子どもたちの診療の要請が増えている。初診時になるべく丁寧にみて、必要なケースはフォローし、成長を見守っていくように心がけている。

背後から「まきばの家」のスタッフたちとの協力がえられていること、さらに、豊かな自然環境、動物たち（現在、待合室、診察室の前に4～5頭の羊が放牧されている）が備えられていることに感謝している。診療所内のデイケア空間を「居場所」として生かし、退職された教師が、2011年5月より、週1日から2日勤め、小学生の遊びを中心としたグループ活動や、小中学生の個別面談や学習指導をして頂き、個々の子どもたちに、より細かく関わるのが可能となった。

2. 「ディアコニア」「まきばの家」「こどもの家」により連携するためのあり方について模索した。

必要な「こどもの家」「まきばの家」の児童、青年を診察しフォローしている。「ディアコニア」の入所者も必要な方の診察を行いながら、各施設スタッフの相談に応じた。今年度も「まきばの家」の症例検討会（児童相談所の職員なども参加）に、診療所スタッフも可能な限り参加した。「まきばの家」以外の児童養護施設、自立援助ホームの職員などとの交流、研修会にも、「まきばの家」の職員と共に参加した。5月、北海道家庭学校（1914年、留岡幸助 創立）へ、明比理事長、「まきばの家」スタッフたちと訪問し、50年あまり、酪農を継続しながら営んできた「デンマーク牧場」での営みについて、これから一層展開させていく意義について深く学ぶことができた。

3. 比較的小規模な地域において、福祉・教育・医療連携の可能性を、特に養護が必要な発達障がいなどの子どもたちを中心に据えながら模索した。

袋井市と掛川市の特別支援教育支援チームの委員長、静岡県西部の就学指導委員会と袋井市の就学指導委員会の委員を継続して勤めた。磐田市教育委員会にて、あるべき特別支援教育について教師への講演をした。2010年4月より、袋井特別支援学校磐田分校の校医を勤め、袋井特別支援学校全体に在籍する子どもたちのために教員からの相談に応じた。今年も袋井市のしあわせ推進課、教育委員会、保健センターが、横断的に連携し、子どもの事例検討会を参加した（4回）。

4. 日本キリスト者医科連盟静岡部会（武井が部会長、柴田恵子看護師が会員）の例会開催

デンマーク牧場福祉会と共催し、4回、「まきばの家」や「ディアコニア」を会場にして講演会を開催した。1月15日 清水範子氏「タンザニア母子保健医療活動報告」、4月9日 若井晋・克子夫妻「若年性アルツハイマー病とともに生きる」（100名あまり参加）、6月9日 諏訪恵子氏「カンボジア保健医療報告 虐待を受けた女性たちの保護活動」、9月10日 武 義和氏「小国folkホイスコーレ実践報告」。

その他、6月20日、金城学院大学の新生に「真実な交わりを求め、心を開きあうこと—児童精神科医師として、デンマーク牧場の営みに関わるに至ったこと—」と題して講義した。9月19日、日本福音ルーテル教会東海教区女性会全体会で（まきばの家にて）、「主にある交わり・喜び・祈り—精神科医師としてフィリピ書を学ぶ—」と題して講演した。